
流れ星

GWINKO

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星

【Nコード】

N0063L

【作者名】

GWINKO

【あらすじ】

ある冬の夜の銀時と十四郎の物語。

（前書き）

銀魂二次小説で銀土作品です。

BL要素を含む作品ですので、それを踏まえたうえでご覧ください。
この作品は「銀土裏妄想劇場」から転載したものです。

その晩はやけに冷え込む夜だった。

部屋で煙草に火をつけ十四郎はぼんやりと天井の隅の闇に目を向けていたが、ふと煙草の火を揉み消すと薄物の羽織をまとい屯所の門を出た。

さえざえとした空気は夜更けの闇を際立たせ星々はこぼれるような輝きを放っていた。

目的地は屯所から少し離れているが、行きの昂りと帰りの余韻を冷ますにはこれくらいの距離が十四郎にとってはちょうどよかった。

白い息を吐きながら、十四郎は歩を進めた。

いつもの土手の脇を通り抜けると、小さな屋台が出ており、中からはおでんの煮えるいいにおいがしていた。

「買ってくかな…。」

十四郎はのれんをくぐった。

「よお…。呑みにきたのか？」

のれんをくぐるとそこに銀時がいた。

「ゴメン親父、今頼んだのぜんぶ食べてくわ。ついでにぬる爛もつけて…。お前もぬる爛でいいだろ？」

「ああ…。」

羽織を脱ぎながら返事をする。銀時が羽織と赤い襟巻を持って隣に少し動いた。

「はいよ…。」

親父が徳利と杯ふたつ、おでんを差し出した。

皿の上には卵に大根、こんにゃくとがんもが2つずつ入ってた。

「寒いから、持ってこうかと思ってな…。」

銀時は微笑みながら徳利を差し出した。

十四郎は無言で縁台に腰掛けるとを銀時から杯を貰った。

「親父、こいつにマヨ出してやって。」

「はいよ…。」

湯気の方からマヨの容器が現れた。

黙ったまま十四郎は容器を受け取ると大根の上におもいきり絞り出

した。

いつもは、やかましく言う銀時が今晚はなにも言わず黙って杯を傾けている。

十四郎は沈黙が怖くなり、銀時になにか話さなければと思ったのだが今晚に限ってなにも思い浮かぶ言葉がなかった。

ちらりと銀時の横顔を覗き見ると、銀時は穏やかな顔で杯を傾けていた。

ふと銀時が十四郎の視線に気づきちらりとこちらに視線を向け微笑んだ。

考えてみるといつも慌ただしくぬくもりを求め別れるだけのふたりがゆるりと酒を酌み交わすなど稀なことであった。

銀時が黙っているのはこの時間を楽しんでいるのだらうと十四郎は理解し自身もこの時間を楽しむことにした。

「うまいな…。」

「ああ、格別だ…。」

傍らにいるそのぬくもりが心地よくふたりはただ静かに杯を傾けた。

「旦那方、そろそろ店じまいにしたいんですが…。」

徳利を数本空けたところで親父に店じまいを告げられた。

少し名残惜しく感じながら十四郎が懷から財布を出そうとすると銀時がその手を止めた。

「今日は俺のおごりだ。」

そついうと銀時は親父に金を払った。

「すまない…。」

十四郎は羽織をまとうとのれんをくぐった。

時刻も夜半近くなり、しんとした冷え込みは空の蒼さを際立たせ星々がいまにも零れ落ちてきそうだった。

「風邪ひくぞ…。」

白い息を吐き、空を眺めているとふいに背後からふわりと首筋に暖かいものがかけられた。

銀時の赤い襟巻だった。

「すまない…。」

しっかりと巻きなおした襟巻からは銀時の髪と同じ匂いがした。

「じゃあな…。」

銀時はそういつと右手を上げて屯所とは反対方向の万事屋へと歩きはじめた。

十四郎は遠ざかる銀時の背中をしばらく見送ると自身もと来た屯所への道を歩きはじめた。

しばらくすると十四郎は歩みを止め、銀時の襟巻を巻きなおしながら夜空を眺めた。

そのとき空にひとすじ光が流れた。

十四郎は踵を返すと銀時を追いかけた。

いくらかも行かないうちに銀時がこちらに向かって歩いてくる姿が見えた。

『…。』

ふたりは沈黙したまま少しの間向き合っていた。

「…流れ星。」

沈黙を破って十四郎が口を開いた。

「ああ…。きれいだったな…。」

銀時はやさしいまなざしで十四郎を見つめたえた。

十四郎はしばらくためらっていたが言葉を続けた。

「…今晚は来ないのか？」

銀時は返事の代わりに十四郎を抱きしめるとくちびるをかさねた。

ふたりの上を光がまたひとすじひとすじと流れては消えていく。

「襟巻ないと寒くてな…。送ってくよ。」

「ああ…。俺も返さないと落ち付かなくてな。」

少し照れくさそうに笑いながらふたりはそっと寄り添うと同じ道を歩きはじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0063/>

流れ星

2010年12月9日06時24分発行